



『いつ間伐するの？今でしょ!!』
「間伐」

日本は国土の3分の2が森林である、世界でも稀な森林大国ですが、その森林の4割は戦後植えられたスギやヒノキ、カラマツなどの人工林です。そしてそれらの人工林の半分が50歳を超えようとしています。手入れをしようにも、手遅れになる危険がいよいよ差し迫ってきています。即ち、間伐をしても、残った樹木に良好な成長を期待できない、そんな状態に近づきつつあるということ

なのです。そもそも間伐という言葉の定義はあいまいで、樹木間の過大な競争を緩和し、残った樹木の生長を促すためのものが、本来の意味だと思つていますが、収穫のために市場価値の高いものから順次伐る行為も間伐というからです。保育のための間伐か、収穫のための間伐かの違いですが、どちらも間伐という言い方をします。



梢がどこを通過して倒れるかイメージ



言葉の定義はともかくとして、2020年には国産時の生産量を現状の2倍にして、木材自給率を50%にするという森林・林業



切り株で伐倒の反省会

再生プランも2009年に策定されたことですし、ほとんど間伐をして、どしどし材を出したいものです。それにしても今、材価が低すぎるのは今の大きな悩みの種です。

7月13・14日(土・日)
年間コース第6・7回
間伐

参加者/金児さん、須永さん、滝川さん、中川さん、中村さん、原さん、守屋さん

講師・

バックリで受け口作り
岡川、島野、生崎、フノ、島松、早川、大先

発行 KOA 森林塾 (事務局) 0265-70-7065
編集 早川清志
題字 島崎洋路



それは一杯の珈琲から始まった。
世の中の摩訶不思議。あなたは信じますか？

あるとき、職場の同僚達と、こんな話をした。「私、バリスタめざしてるんだ」「なにそれ?」「コーヒートのソムリエみたいなもの?」「へえ、コーヒーカーあ」「俺、夏でもコーヒーはホットしか飲まない」「へえ、変な、こだわり」「こんな日常の会話が最初のキーワードだった。「そういえば、ドリンクバーの店しか浮かばない。今、思いつく喫茶店ってないなあ」

で挑んでいた。仕事の合間をぬつての通院は、今までの日常になかった非日常を与えてくれた。友人が走りやすいから、と塩尻から山麓線を抜けていく道を教えてくれた。非日常が美日常に変わる日が来た。

あれ、こんな所に信号があったつけ、とたまたま停まった十字路。なにやら黄色い旗が一本せわしなくはためいている。こんな所に喫茶店があるんだな、よし行ってみよう、と時間のあるときを見計らって行動に移した。

信号を曲がって50m、店らしき入り口を見つけた。車でどっこいしょっと、駐車場らしきスペースへ乗りつける。なんか草がいつぱいで、車を停めるのも気がひける。どきどき不安を感じながら車から降りてみる。そこから頭上を見上げると店らしき建物がある。えいと、あそこへ行くにはここを上がるしかないよね。かろうじて人が歩けるスペースは草が刈つてあるようだ。一步一步草刈りの跡を確かめるように登って行く。途中で、オープンテラスで使用されていたと思われる洋式チェアとテーブルがあった。でもひっくり返ったままだ。ん、これは…。今はお店、営業していないかもしれない。空き家かな、と考えつつも、足元の草だけはきれいに刈ら

れていることに導かれ、一步一步その階段を上がつてみた。すると、ビニールホースの先から水がチヨロチヨロと流れている。沢の水でも引きっぱなしのようだ。これは、ますます閉店の可能性大きいな。入り口らしき所に目をやると、小さく「OPEN」とある。え。サッシの戸におそるおそる手を掛ける。あつ、開かない、と、当然そうなることを100%予定していた私は驚いた。カラカラカラ…。あれ?開いちゃった。え?何?やっぱりお店?とおそるおそる足を踏み入れる。小さな店の空間はこじんまりと、とてもシンプル。キッチンには一人の老人が座っている。「あつ、いらっしやいませ」とマスター。「あの、入ってもいいですか?」と確かめると、「どつぞ、どうぞ」とマスター。おそるおそる入店して驚いた。なんとまあかわいらしいすてきなお店。しかしあきらかにマスターは慌てている。

テーブルに着き、水を頂く。メニューに目を通す。ん、何これ?ガテマラ、コロンビア、ルワンダ、マンデリン、x x…。やばい、このメニュー、私には理解できない。うわ、これは、どれをたの…。あの、おすすめるコーヒーはありますか?と聞いてみた。すると、「東チ

後日予約して来店を果たす。この店の食後のコーヒーは両手でそっと抱える、カフェオレポウルにたっぷり注がれていた。うーん、こもいいたい。この店も遠く異国へ旅をした気分させてくれた。

さて私をこれだけワクワクドキドキさせてくれた松本のカフェは、営業時間が一週間のうち水・木お休み、月末20日以降はお休み。また限定期間営業で、4月〜12月まで。あとはマスターの体調次第。高齢で来年度はどのなるかわからないという状況に危機感を覚えた私は、冬でもやっているコーヒー店見つけなきゃ、しかも客があまりいない店(笑)と、頭の片隅においていた。

お、あった、あった、箕輪に。看板は古美術、珈琲とある。が、いつ開いているのかはさっぱり解らない。駐車場は狭く、とても入りづらい。でも、すごく気になる。入るには勇気がいる。チャンスは来た。忘れもしない4月1日、入学式の日、伊那までの往復の途中、あっ開いている。看板の下に「商い中」の文字。よし、帰りに今日こそ寄るぞ、とひそかな気合を込めていた。同僚にも付き合ってもらい、一人で乗り込んだ。狭い駐車場に車2台で無理やり入ろうとするとところへ、店主が飛んで来た。

「あっ、だめだめ、上がぶつかっちゃう、こっち、こっち」と大騒ぎのオーブニングで別の駐車スペースを案内して戻った。念願叶って来た。店の中は暗くて寒い。それでも好奇心を大いにそそる木彫の数々。ご主人と大盛り上がりで話すこと1時間はあっという間。そしてこの珈琲ギャラリーも、私の身近な行き付けとなった。店主、中澤達彦さんは知る人ぞ知る、木彫家の第一人者。この方の作品は生命力に溢れている。静と動が一つになり、作品はどれを見てもワクワクドキドキ。それが何気なく、さりげなく置かれているのです。い。落葉樹の柔らかさの中に、永遠の命を感じた。

さてさて、一杯のコーヒーのご縁からここKOA森林塾にたどり着くにはもう一人の登場人物がいる。松本の馬場屋敷の馬場さんである。この方とも、松本のカフェ、「ヒエンツ850」でご縁を頂いた。松本の牛伏寺から高ボッチの北、鉢伏山登山を案内して頂いた。登山道の木漏れ陽、ピーク展望台からの景色、長い林道もすべてにワクワクできた。この日の山体験が20年振りの私の山体験に火を付けた。そして鉢伏山の山小屋でも、ワンコイン(500円)で極上のコーヒーが飲めたことにも感激した。そんな時だった。とある喫茶店、「おーい、山へ行こうよ」の本に出会ってしまった。

この夏、再々度鳩吹公園へ通つことになるとは、更なるワクワク・ドキドキ、冒険への扉だ。そういえばここは風の谷、いい風が吹く。森のこの、木のこを身近に考え、何もかもはできなくても、今、できること」に挑戦していきたい。

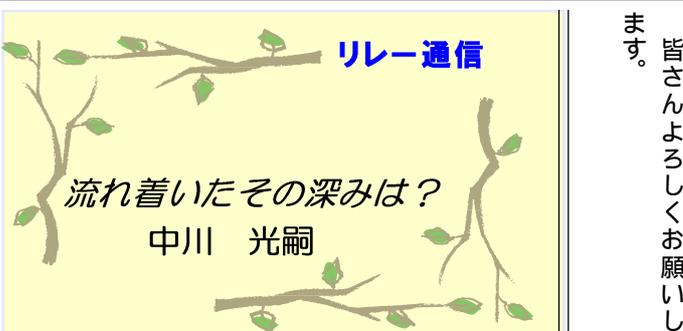
一杯のコーヒーからここ森林塾にたどり着いたという、摩訶不思議なお話です。いまだに珈琲には何のこだわりもなく、自宅ではインスタント・コーヒーを飲んでいる私。

皆さんよろしくお願います。

リレー通信

流れ着いたその深みは？

中川 光嗣



夕時になればカエルの大合唱にふと気づき、田んぼの水を心配する。つい数年前までは想像もつかなかった暮らします。東京で生まれ、学生の頃に親元を離れるまで神奈川で育ち、その後大半を南関東で過ごし、いまは雪国帯であり、魚沼産コシヒカリの米どころ、新潟の十日町で地域おこしの仕事をしています。特に縁もなかつた土地に飛び込み、よそ者として地域の抱える問題と向き合う。同時に自身の今後を模索する日々です。

過疎化が進み、担い手が不足した集落では「諦め」の気が持ちが蔓延しています。それも仕方ありません。十日町に来て、住み始めた村は僅か7軒の限界集落。私を除けば一番下の世代が50代半ば、そして60代以下はほぼ独身。こうした驚くべき地域の現実には知れば知るほど根が深く、「えらい所に来ってしまった」。

自嘲的に現実を受け止めることもあります。当初、周りのお年寄りは4mを超える豪雪にたまって逃げて帰るのでは?と想像していたようですが、それ以上に驚愕することには事欠きません。同時に、辺りを見渡すとそこら中に山菜やキノコが豊かにあり、スギ林や雑木林の

奥にはブナ林が広がり、良質な水源となります。この水は当然、最高の米を育むだけでなく、正に地域のライフラインです。雪解けの春には山菜を求め、わざわざ上越の国境を越えて群馬ナンパーが押し寄せる程。理由は明快、雪国の山菜は柔らかく、とても美味しいからです。そして地域の人々の温かさ、言うまでもなく、豊かな自然と共に心洗われることが多くあります。何れをとっても都会では得られない経験、未だに驚きの連続。田んぼのぬかるみに嵌りかけているのでしょうか?一向に都会の生活に戻りたいとは思いません。

前置きが長くなりました。私が森に関心を持ったきっかけは、これと二つに絞るとはできません。以前、獣害に興味を持ち、長野で鹿肉や猪肉を使った飲食店でやるうかと、調理経験のある友

人とおれこれ探り入れていた時期がありました。なぜ獣害に興味をもったか?都会でそれまで日本の地方を知らなかった者にとって、シヨッキングな事実であったから:実はよく覚えていないのです。湘南の比較的緑に恵まれた町で育ったことや、建築設計の仕事で環境について考える機会が多かったこと、東日本大震災も少なからず影響しているはず

です。ここに至るきっかけは昨年の4月、県内である環境活動家の講演において、「皮むき間伐」という手法を知り、これなら自分たちにも出来るだろうと行動に移しました。講演の2ヶ月後、「皮むき間伐」の研修で、同じ関心を持つ近隣の方々との出会いを通し、KOA森林塾を知りました。まずは同僚が昨年の集中講座に参加したのですが、

もちろん僕もこの中で、私の行動力があるうかと、元気があ

母さん



に先を越されたのです。

その頃から、地域で森との関わりがどのようであったか、より聞き込みを始め、昭和の中ごろまでは村のあちこちで炭焼きを生業としてあつたことや、木挽き職人、移動製材が健在であったことも知りました。また、山主さんの気持ちとしては「銭にはならんども、おらんしよの財産には変わりぬ」だんがのう。」という思いが支配的であり、十年以上放置された森林がほとんどであることも分かりました。

そして、雪国では今も昔もいわゆる「林業が成り立たない」という認識を深めながら、またある部分、この地域ならではの森の活かし方に可能性も見出すようになり、それからこそ知る、様々な驚くべき事実。例えば屋根の融雪に一冬でかける灯油の代金。雪の重みで大きく湾曲した幹をもつ根曲がり木。一般的にはネガティブに捉えられがちなことです。あるいは、雪があまりに深すぎるためにシカやイノシシの侵入がない(森林の獣害はほとんどない)ことや、雪の重みで自然間伐がなされ、放置されているも下草がある程度茂っていることなど、視点を変えればプラスに捉えられることもあります。当然、地域で

は多くの難題を抱えている現状、私が想い描く雪国の森の活かし方は、まだまだ個人的な想像の域でしかありません。周りの方々を山に駆り出すだけの説得には時間がかかりそうです。それなら、まずは地域の方々から山との付き合い方を学び、自分なりに楽しみながらやるしかない。今度90の爺さんに炭焼きを教わります。

田舎暮らしの中で、常々感じるのは人との繋がりが、出合いの多様さです。月並みですが、移住するまで、さほどその価値に気付きませんでした。これは森の活動を始めてから、より一層実感する場面は増えました。KOA森林塾には、技術や森づくりの知識を得たいというだけでなく、それを求める部分が当初からありました。通年コースはまだ前半なのでこれからですが、森仕事を生業とする上で、森と対面するだけでなく、周りの人々といかに関係を築くか、そのようなことを既に教わりました。

先ごろ某N局の番組で放映された居酒屋店主の言葉。「縁で仕事をやる。愚直なまでにやり続ける。」山林に足を踏み入れかけた私のテーマとなりそうです。

“日本林業の行方”

コラム



その③正鵠な森林台帳が欲しい

県森連では長野県林務部との申し合わせにより、県下380余(昭和22年現在)市町村の3分の1を引き受け、組合の内外から私ら4人を含めて34人の大所帯の施業計画課が新設されていた。課員の3分の2ほどの組合内部からの新任者は、林務部の担当者からすでに「改正簡易施業案」の手引書による事前研修を受けていたが、私ら4人を除いて林学に関する専門教育の履修者が無く、急ごしらえの手引書は十分な学習が伴わないと理解しにくい部分もあつて、われわれは即講師役も勤めさせられたことが思い出される。

がで、以降今日まで林業関係者の一人として押しなべて充実した年月を過ごす出発点となった。

国内全市町村の施業案編成業務は前後10年間を費やして行われたが、コンピュターはもちろん電卓も無い時代であった。測量はポケッタコンパスとメートル縄のみで、市町村界・林班界(おむね30~50haごと)・小班界(5~10haごと)は実測が原則であり、ほとんど人跡も無い尾根や沢筋を刈り開きながら、30日も40日の休日も無い出張で過ごした日々は、忘れることは無い。また小班内の一筆調査は所有者別、樹種別、林相別などで見取りで区画した後、所定の森林簿の調査を行った。数値計算はすべてタイガー計算機か、そろばんで行われ、一組3~4人で3~4ヶ月を費やした1ヶ村の編成業務はまさに「壮絶」と言うほか無い。1例を挙げると、1ヶ村5000ないし1万

haの場合、5千分の1の図面は4畳半ないし6畳ぐらいの大きさになるが、複写機の無い当時は総て「烏口」(ご存知か?)による手書きで、特注の8畳ほどの製図台に座布団を敷いて上がり、1枚仕上げるのに3日も4日もかけ、原図県・市町村・森林組合用をそれぞれ複写した。同様に分厚い森林簿も総て手計算と手書きで部数を揃えざるを得なかった。編成を終えた施業案は地元市町村の総会の許可を得て発効されたが、大幅な変更や訂正があつた場合の図面や書類の書き換えは極めて容易ではなかった。

森林の維持管理や林業活動の状況が大幅に変貌している今日、わが国の森林計画は根本的な組み替えの必要があるように思われるが、当時のような強力な体制の整備と関係者の熱いエネルギーが求められるところである。光波や空中写真・衛星、おびただしいOA機器、知識技術の大幅な進展、これらの力を借りて、より正鵠な森林台帳の実現を望みたい。

島崎 洋路

おわりに

暑氣払いで大騒ぎをしたことが山の神様の怒りを買ったのか、14日の午後はパケツをひっくり返したような夕立でした。誰も風邪ひいてませんよね。

伊那界限も暑い日が続く、クーラーがないので夜は少し寝苦しい。でもこのあたりはお盆を過ぎれば風立ちぬ、もう秋です。

今週は専門コース、来週は集中コースでまたひと汗かきますか。



後で述べるように、1年半の在籍中、私は県下3ヶ村(当時の下水内郡永田村、下伊那郡和合村、小県郡青木村)を担当し、社会人第一歩としてのかけがえの無い数々の経験を体得すること

投稿大歓迎。ご意見ご質問は早川・松岡(事務局)までお気軽にご連絡ください。
TEL 0265-70-7065
FAX 0265-70-7994
E-mail: mi-matsuoka@koanet.co.jp
ki-hayakawa@koanet.co.jp
携帯:090-4463-0062(開催日)
URL http://www.koanet.co.jp

